

つれづれなるままに 第16号

令和元年12月26日（木）発行



校長 深谷 浩一

ボランティアって何だろう！（2）

～「こんなきれいな海をどうして平気で汚せるの？」～

トッド先生の企画を賞賛し、ともに大洗海岸のクリーンアップ作戦に参加した私は、その企画の意図などを改めてトッド先生から聞いてみることにしました。それをまとめたのが以下の「地球の日—大洗にて」でした。

【ボランティアに関する実践報告】

地球の日—大洗にて

Todd Frary

英語指導助手、茨城県立中央高等学校

1996年の秋、私は友人たちと共に人気のある大洗の浜辺を歩いた。すがすがしい日に素晴らしい景色を眺めることを期待して出かけたのだ。しかし、そこで見たものは想像していたものとはかなりかけ離れたものであった。

浜辺はそれこそ汚れていた。見渡す限り、砂の上にはゴミが投げ捨てられていた。私たちはみな嫌気がさし、同時に日本人に対する怒りさえ感じた。環境に対してこれほどまでに無関心に、どうしてこんなに美しい海岸を汚せるのであろうか。ゴミのほとんどは偶然落とされたというより、むしろ長い夏の期間にわざと捨てられたものだった。

その日、私たちはまた夏が来る前に再びこの浜辺にやって来て、出来るかぎりたくさんの方々とともにここを掃除しようと決心したのである。私たちはこの問題を水戸で行われた茨城県JET（Japan Exchange Teacher: 外国人招致事業で来日している外国語教師）の会議で持ち出した。そしてそこで、参加者100名に大洗の状況について知らせ、私たちのボランティア活動に対する理解と協力をお願いしたのである。

私たちの計画は実現した、当初の期待をはるかに越えて。茨城県国際交流協会（the Ibaraki International Association）や県庁の国際交流課（the Prefectural International Affairs Division）の協力を得て、県内の各校、各団体にこの計画への参加を呼びかけた。JETのメンバーも勤務する学校でポスターを使ったり、この大洗の問題を授業の中で取り上げて、生徒たちに知らせた。たとえば、私の場合、大洗で撮影したビデオを授業の中で見せたりもした。

そもそも私たちは大洗を一つの例として、環境に対する意識の高さを日本人に、そして茨城に住む外国人に示したかっただけである。私たちの目標は、想像していた以上の情熱に迎えられて見事に達せられた。計400名の人々がボランティアのクリーンアップ作戦に参加してくれたのだ。97年4月29日、地球の日（Earth Day）の日である。長さ2キロにわたる浜辺の清掃には8時間以上かかったが、どの人も一日中生き生きと活動していた。

大洗海岸クリーンアップ作戦が大変な成功を収めたので、私たちとしては将来も同じような行事を組織的に行うことを決めている。できれば毎年地球の日。そして県内の他の場所でも手助けを必要とする地域があれば、是非取り組みたいと考えている。

この報告をお読みになって、たぶんみなさんは私たちが成しえたことの素晴らしさを感じていただけるでしょう。将来は私たちのお手伝いをしたいとさえ、お考えの方もおられるかも知れません。しかし、もしみなさんが「その話をする」（talk the talk）のなら、（つまり、何かをしようとするのなら）、どうぞ「実際に歩いて」（walk the walk）（実際に行って）みてください。私たちが将来はみなさんに是非お手伝いいただきたいと考えているのです。直接水戸市の茨城県国際交流協会にお問い合わせいただいても結構です。電話は、029-241-1611です。

さらに「その話をする」（talking the talk）とか、「実際に歩く」（walking the walk）ということに関して言えば、まずはどうか身の回りの環境に優しくしてあげてください。今度誰かがゴミを投げ捨てるのを見かけたら、「茨城の『環境を愛する友』がとてものがっかりしますよ」、とやさしく声に出して注意してあげてください。そしてもっと大切なことは、あなた自身もその一人であることを教えてあげることです。

（トッド・フラリー／深谷 浩一訳・茨城県立中央高等学校特活部）

これを読んだ私は、これが単なる『ボランティア活動記』ではないことに驚きました。というのは、そこには「環境問題に対する意識の高さ」「高尚なボランティア精神」とともに「日本の高校生、さらには日本人全体に対する痛烈な批判」を秘めていることを直感しました。そこで、それをさらに詳しく知りたいと思い、トッド先生とのインタビューを試みたのです。それが「EARTH DAY - OARAI」という記事に添えられたインタビュー記事です。

私はこれを3年生を対象とした選択科目「時事英語」か「英語表現」の中で扱ったように記憶していますが、これを読んだ生徒の反響は、想像以上に大きなものでした。



生徒とともに大洗海岸にて。左端がトッド先生、右端は筆者。

「トッド先生の言うことはもっともだと思う。」「トッド先生のような先生が日本にいないのが残念。」「こんなことを教えてくれる先生が増えればいいと思う。」、あるいは「こんな意見をもっと早く知りたかった。そうすれば私の高校時代はもっと別のものになったと思う。」などなど、トッド先生に対して肯定的な意見が多かったのも私にとっては驚きでした。というのも、前号で紹介したように「日本人の知的レベルはアメリカ人の12歳と同じだ」と言い放ったマッカーサー元帥に対するのと同じ感情を、私は当初トッド先生に対しても抱いていましたが、「日本人は幼稚だ。大人になっても電車の中でマンガを読んだりポケモンで遊んでいる。そんな大人が高校生に対して「成熟した (mature) 大人」になるための教育などできるわけがない。」と断言したのです。しかし、その時の私は、「日本の教員」として多少なりともカチンときて、「そこまで言わなくても・・・」という思いは抱いても、「それは誤解だ。日本人はあなたの言うほど、幼稚ではない。その証拠に・・・」と強く反証することも、残念ながらできなかったのです。



さて、ここで、改めてインタビュー記事でのトッド先生の主張を整理してみたいと思います。(この記事については、『ボランティア活動の日米比較～トッド・フラリー氏に聞く～』参照。)

- (1) アメリカの高校では、環境に対する考え方を学び、その考え方に基づいて実践(ボランティア活動)することが求められる。
- (2) アメリカでは、大学入試において、ボランティア活動の経験が重視されている。
- (3) 日本人がボランティア活動に参加しない理由は、
 - ① 社会的な責任を学ぶ場がないために、自己中心的になってしまうから。
 - ② 日本の高校生は幼稚(「社会参加の点ではアメリカの12歳と同じ。」)だから。
- (4) アメリカでは、高校生は社会から「若い大人」と見なされ、大人の活動に参加したり、大人の責任について学ぶことを期待されている。日本の高校でも、生徒を大人扱いし、生徒にもっと社会的な責任を負わせるべきである。

(5) 日本の教師は、しつけなど親の仕事は親に返し、学校では学校としてなすべきこと(社会的な責任を学ばせるなど)をなすべきである。



ごみ拾いに取り組むトッド先生

これらのトッド先生の指摘は、あれから20年以上が経過した現在でも、耳を傾けるに値する意見ではないかと思われます。

今回は、これらの主張に対して、当時の生徒達がどんな反論を展開したのかについて、詳しく掘り下げてみたいと考えています。(つづく)